「漫画家」像の構築過程に関する史的分析
――大正期の漫画家集団「東京漫画会」を事例として

東京大学大学院学際情報学府　鈴木麻記

１．目的

本報告の目的は、「漫画」や「漫画家」といった概念が不定形であった大正期において、「漫画を描く」という行為そのものに、いかなる意義が付与されていたのかを明らかにすることである。

明治期に「ポンチ」などとも呼ばれていた漫画的表現は、政府から取締りを受け、内容から諷刺性が欠如し、滑稽が強調され、春画的内容も増加する。こうして漫画的表現の社会的な評価は低下した。この状況を背景に、大正４（1915）年に結成された東京漫画会は、展覧会や「漫画祭」というイベントを開催し、漫画／漫画家の社会的評価の低さに対する活動を行った。この東京漫画会に関する先行研究としては湯本（2005）があるが、この集団の内部で「漫画家」としての職業規範がどのように語られていたのかについては、十分に議論されていない。

そこで、本報告では、この東京漫画会という集団内部で交わされていた漫画論を分析することによって、「漫画を描く」という行為そのものがどのように認識されていたのかを明らかにする。そして「漫画を描く」行為を職業とする、「漫画家」像が、いかに構築されていたのかを考察する。

２．方法

分析対象は、東京漫画会が主体となって発行していた、機関誌『漫画』と『漫画の畑』における漫画論である。資料を分析する理論的枠組みとしては、P・ブルデューの文化生産の「場」の理論を採用する。「場」の理論を導入することによって、文化生産に関係する人々の総体の間に結ばれる客観的諸関係からなる空間と、その歴史性を問題にすることができ、「漫画家」像がいかにして歴史的・社会的に構築されたかという本報告の課題において、適切であると考えるからである。

３．結果

大正６（1917）年に創刊された『漫画』において、シリーズ化された「名士の漫画観」という論考においては、衆議院議員という「名士」に漫画を語らせるという形式そのものによって、「漫画」や「漫画を描く」という行為に意義が与えられていた。こうした構造は雑誌『日本一』の漫画化号の特集にもみられる。一方、大正 11（1922）年に創刊された『漫画の畑』においては、「民衆芸術」としての漫画を描く意義が、漫画家自身によって積極的に語られた。このように、「漫画を描く」という行為の意義が、既存の権威を借用するのではなく、漫画家自身によって語られるようになった。この際多用された概念が、「民衆芸術」というものだった。

４．結論

当初は、「漫画を描く」という行為の意義は、「名士」の権威を借りることでしか語りえないものだった。 しかし民衆芸術論の影響を受け、漫画に「民衆芸術」という意義が付与されていく。漫画は「民衆の爲めの叫び」を表明するものであり、漫画家は社会に働きかけるべき存在として位置づけられた。このような形で、「漫画を描く」という行為に、社会的意義が見出されていった。

このようにして東京漫画会の内部で、漫画という社会的評価の低いものを描き続けることは、自分にとっては利益があるのだと思い込むために必要な、「信仰（illusio）」が形成されていったのだ。

文献

湯本豪一, 2005,「東京漫画会―岡本一平を中心に」『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版